

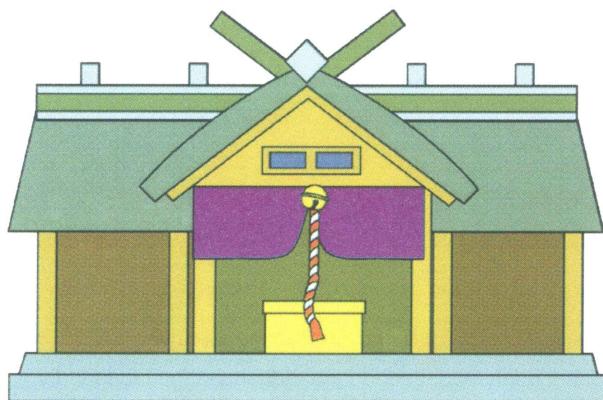
エコツアーカフェKOZU開催のお知らせ

テーマ

神津島の



# 寺社と信仰



について

ゲスト梅田勝海さん

お気軽にご参加ください。事前申し込み不要、参加自由です。

「エコツアーカフェ」は、地域の未来に関心をもつ人が気軽に集まり、おしゃべりをする場です。

日時 6月27日(木)午後7:30~午後9:00

会場 開発センター

主催 神津島村商工会

(Tel 8-0232)



神津島の社寺と信仰

神津島史談会刊

## ◎あきら様と愛宕様

神津沢に架かる千歳橋を見下ろす丘は、上の山と呼んでいます。

昭和四七年から四九年にかけて、この山の畠の発掘調査をした、武藏野美術大学考古学研究会は、縄文早期の土器や黒曜石のフレーク「破片」が多数発掘されたので伊豆諸島も古い時代に黒曜石の加工をした、先住民の住居が在った処ではないかと言われている所です。

そしてこの山の中腹に、昔から島の人たちが「あきら様」とか「あきや様」と呼び敬っている小さな神社があります、山や畠に通じる勾配の強いダラダラ坂の右手に高さの不揃いの石段の奥に、古びた自然木の鳥居が立つ広くも無い境内が「あきら様」です。

この頃この「上の山」一帯が急傾斜地の指定を受け、防災工事が行われて以前のような雰囲気は消えていますが、さすがにこの境内に入り鳥居の向こう側に西向きに建つお序屋を前に、其の裏手に十余段の階段上の、御神体を納める石室を前にすると心が引き締まる思いがします。

石室の両脇には高さが一メートルほどの石燈籠が並び、苔むして銘は見えませ

んが古い時代の物と思われます。

お序屋も境内も良く手入れが届き、清々しい雰囲気に掃き清められて、この神様を守る講の人々の心がけが偲ばれます。

この（あきら様）は、島の石田清七家他六軒の家で講を作り、毎日奉仕をされ怠る事が無いということです、けれども講の人達もこの「あきら様」の御祭神については確かな事は判らないが、先祖から引き続いて代々奉仕をしているだけ、と話して呉れました。

それでも講の世話人をしておられる、清七家の御主人石田茂利夫さんは、

「この神社を皆さん、「あきら様」とか「あきや様」とか呼ぶので、私は秋庭山神社ではないかと思っています、実はこの神社は以前他の家で祀っていたのだそうですが、何かの理由で石田の先祖が祀ることになつたと聞いています。それをこの山に移してから代々この神社の世話人を、世襲するのだと先代から聞いています」と話して呉れました。

この神社が秋葉山神社であれば、御祭神は静岡県の北西部周智郡春野町の、秋葉屋山神社の御祭神「火之迦具土神」（ヒノカゲツチ神）で火難除け「火伏せ」の神ではないかと思われます。

また同じ山裾続きで、この「あきら様」の建つ「上の山」から、沢一つ隔てた山中に「あたご様」が祀られています。

ここは神津小学校の敷地続きの尾根で、学校裏からの登り道は自然の丸石を階段に並べたダラダラの坂道ですが、尾根の中腹に境内とも言えない狭い台地に、崩れかけた土手に木造の小さな祠が、少し傾いて祀られています。

台地の周りには椎やタミの古木の根が、雨風にさらされて露出していました、また手入れの届かない境内は、落ち葉が風に吹き寄せられて、荒れた感じがしています。

数年前にこの「あたご様」の話を伺いたく、「あたご様」の下に住んでおられた清水宇右衛門家の御主人を訪ねた時、年老いた御当主が体調を崩されて入院されていると聞き、止む無く引き返したことがありました。

またこの「あたご様」が「愛宕様」であるとしたら、この神様も「あきら様」と同じように火の神で「火伏せの神」とも考えられます。

京都市の北西、右京区嵯峨愛宕町の「愛宕神社」は雷神を祀り、防火の守護神として信仰を集めていますが、御祭神は「火山靈神」「火之架具土神」とも言わ  
れ、神仏習合の神とされています。

因みに東京都港区の愛宕山には、「愛宕權現」（權現とは仏が化身して日本の神として現れるることを言います）が祀られています。

それでは何故このように火伏せの神が、同じように二社もあるのか、其の理由とは何かを、島の古い暮らしぶりを振り返つて見ましょう。

島の歴史を見るとまず正徳の年間〔西暦一七四七年～一七一五年〕に、「ポチ火事」と呼ぶ大火があり、島中の家を残らず焼き尽くした、大火があつたと伝えています。

ところがそれから四〇年も経ない延享四年（西暦一七四七年）には、「下の沢火事」と言う大火があり、またまた島の人たちは丸裸になりました、それは青木昆陽の勧めで徳川幕府が島々にさつま芋の種芋を配り、栽培を奨励した年から四年目のことでした

当時の人の寿命を考えても、短い人生の中で一度ならず二度も、家屋や家財を失う火災を経験した人たちは、赤い炎の恐怖を心から恐れたに違いありません。そうしてその人たちはその恐れからの平安を願い、「あきら様」や（あたご様）を祀り、火難除けを祈った事がこの二つの神社の、創始の由来とも思えます。それでは当時の島の様子はどうだったのでしょうか。

一島一村の村落は島の西側の台地に集り、東の高処山「タコウドウ」の麓から、西の海側に掛けて緩く傾斜していく、秋が深む十一月から春の三月までは、海側から吹き上げてくる、強い西の季節風は村中を灰色に変えてしました。そのため家屋の周りには、敷地の地拵えのとき出てきた石塊を、敷地の廻りに積み重ねたり、篠竹の防風垣根で風除けをしつらえました。

この囲いの中に建てられた家は、萱「八丈まぐさ」と言い、長さが内地の萱の三分の一ほど」に麦藁を混せて屋根を葺き上げ、雨水の浸み込みを防ぐ為に、屋根の勾配を強めたり、軒先もまた低めに葺き、縁の下は高くして湿気を防ぎ、縁側は狭く濡れ縁で其の内側に障子と雨戸が一体となつている構造でした。軒先が低いためと家の周りを取り囲む石垣や篠竹の垣根は、いつも部屋の中を暗くしていく、今のようにガラス窓の無い時代ですから、明り取りと言えば煤けた色の障子からから差し込む日の光と夜は石油ランプの淡い光だけでした。入口は大戸「おうど」と呼ぶ車の付いた重い引き戸があり、引き戸には潜り戸がしつらえてあり、それを潜ると玄関になる広い土間で、片隅に農作業用の道具が並べられていました。

ここは雨や風の強い時も作業が出来ましたし、「タリモト」と言う今の台所は暗

い板張りの床で、其の土間には大型の水甕（みずかめ）が据えられ、子供たちは学校から帰ると、一日分の水を近くの水道の供用栓から、何回も運んだものでした。

「タリモト」で調理したものは、年中火種を絶やさない囲炉裏（ユルイ）の自在鉤に吊るしたり、五徳（ゴトク）に載せて煮炊きをしましたが、今考えると危険な（ユルイ）だつたと思っています。

島に簡易水道が敷設されたのは大正十五年の七月です、それまで水の手当てはどうしていたのでしょう、大凡の家では庭先に石積みの四角な貯水池を作り、雨水を溜めて日常の用にしていました。

明治三二年の十二月未曾有の大火があり、戸数三一〇戸中、十余戸を残し悉く消失してしまい、それでもお寺が残ったのは幸いと言つたと伝えています。

当然の事ですが、高処山からの萱だけで村中の屋根を葺く事はかないません。村有林の奥山から建築の材料として村は放送出する事になりましたが、其の時から萱葺きの屋根は、杉皮葺きに変つたようです。

その事から村は村有林を個人に貸し付け、災害のあつた時の事を考えて、貸付林の制度が生まれ各家では杉、檜の植林をしました。

水道の恩恵を受けるようになつてから、別囲いで「釜屋」（かまや）を建てる様になりました、石を並べそれに泥を塗つた竈は、早くも大きな割れ目が出来、其処から赤い炎がチロチロと赤い舌を出し、板壁や積んである薪を焦がす事もあり、火災の危険度は高いものでした。

しかしそれだけでは無く、家を取り囲む石垣の薪置き場（もしきば）には、嫁の器量を誇示するように、大量の薪が家を取り巻き軒先より高く、キッチンと積み重ねられて乾燥させてありました。

そのため一旦火災が起るとまたたく間に広がり、天井を吹きぬけた炎は風を起して、屋根の萱や麦藁の火の子を空高く舞い上げ、もしきばに積まれた薪も篠竹の垣根もたちまち火の海になり、隣家の屋根に次々と移つてやがて村中を焼き尽くす火事になつたと思われます。

この大火がきっかけに、当時赴任していた小保方栄三郎巡查が、島に人たちに公設消防の必要を説き、非常組と言う組織を作りました、尤も非常組が使用した消防のポンプは、龍吐水（りゅうどすい）と言う木製の水鉄砲ですが、当時は新鋭のポンプでした、今そのポンプは資料館で展示しています、大正の末に修験道の僧が、あたご様で祭を、前浜で火渡りをしたと伝えています。

### ◎庵屋の坂東札所

千歳橋脇の「つばきや商店」横の細道を行くと、やがて家並が途切れで小高い丘の麓に就き当たり、道路はそのままカーブをしながら下り、都道につながっていますが、其の突き当たりから段々畠への登り道があり、やがて叢の中へ続いています。

このダラダラ坂の道は、庵屋の「坂東札所」に通じる道で、つばきの林の峠を越えると下り登りが続き、道なりに辿ると沢伝いに流れる小川に、丸木の橋がかかり、やがて深い木立の沢の中腹を、廻るように道路が取り付けられています。道の両脇には椎の木やタミの木がビツシリ枝葉を伸ばし、日に光りもそれに遮られて土手の土も湿つてているのが判るほどです。

深い沢の下からは沢水の流れる音が、以外なほど高く聞こえてくるので、一瞬深山幽谷に彷徨う心地がします。

やがて島の人々が「庵屋」と呼ぶお堂になりますが、以前の暗い庵屋を想像していた私はその明るさにまぶしいを感じました、山側の土手を削り沢には石積みの土留め工事がされ広げられた台地は日の光がまぶしく照らしています。

以前はつばきの古木に寄りかかるようにしていった庵屋は、新しい台地の北側に寄せて建てられ、今風の明るいガラス・サッシュの引き戸は、南向きの部屋に太陽の陽射しを暖かく届けています。

庵屋の建物は向って右側に入口を設け、土間に続いて畳敷きの部屋になり、其の正面に腰高の祭壇がつくられていて、其処には御本尊佛の千手觀音佛を中心<sup>に</sup>、脇侍佛のように三体の仏像が厨子の中に据えられています、また厨子の下の段には何体かの仏像が左右に並べられています。

御本尊佛を納めた厨子の扉の裏側には、この庵屋の建て替えや厨子の修理をした年月日が墨書きされていました。

改めて庵屋の中を見回しますと、土間近くに囲炉裏が切つてあり、其の後ろの戸棚には湯呑み茶碗、皿などが丁寧に仕舞われていました。

また東側の張り出しには

、昔スタイルの黒い竈（かまど）が据えられていて此処も清潔な雰囲気でした。庵屋の敷地は以前から較べると三倍ほどに広げられた台地は、切り崩した土手から絶えず湧き水が滲み出していて、敷地の中程に浅い溝を掘つてこの湧き水を沢に落としていますが、雨上がりの故か台地の半分は濡れています。以前

は此處に溜柵をしつらえて炊事や掃除の用水を汲み取っていたのですが、この湧き水の多さに気が付きました、今は其の溜柵の代わりに水道のカラんが見えますので、この山中に水道が引かれたのでしょうか。

改築前の庵屋はトタン葺きのこじんまりした建物で、傷みも酷く柱も傾いているようで、裏の椿の古木に支えられているようでしたので、島の人たちが淨財募り改築されたと聞きました。

また境内を取り巻く土手には、数体の舟型の光背を背負う石佛が据えられています、また庵屋の西側には、坂東三ヶ寺の御本尊佛の名を刻んだ文字碑が、東向きにコの字形に並んでいます。

其処から一段高く据えられた石碑には、「坂東三所順礼場」と刻まれています。言うならば坂東札所の礼拝所とでも言うのでしょうか、各地に札所や巡礼場を一ヶ所に祀り、御利益を乞う例は数多く見られますので、島の人達は「庵屋の札所」と呼び、昔から篤い信仰を集めている所なのでしょう。島では家に不幸が在り葬礼がおわると、其の家族や親戚または友人知己は、挙つてこの札所に詣で、二三人で一札とし、五札とか七札になるまで何回も詣でたものでしたが、この頃はこの札所納めは秩父山の、秩父札所へ札収めをするようになります。この

庵屋の坂東札所は忌服明け（ブツクアケ）の時、詣でるようになりました。またこの庵屋の開基については、次のような事が語られています。

今から凡そ二百ほど前の文化年代の末頃、島の嘉右衛門と言う人は、嫁いで間も無い新妻や家族を残して遠く仙台の方へ出稼ぎに行きました。何年か島を留守にして働いていましたが、漸く妻へのまた家族への土産も整えて、島に帰ってきました。

離れて苦労をかけた妻に逢う喜びに、心躍る思いで帰つて来た嘉右衛門を待つていたのは、なかなか帰らない夫を待ち侘びた妻が、亡くなつていたという悲しい知らせでした、思えば手紙の遣り取りも無く、嫁に迎えて数ヶ月の暮らしを心に残して遠い北国で身を粉にして働いたのは、懸命に島の暮らしを支えてくれる、愛しい嫁の苦労を思えばこそ、ひたすら心の中で恋しい思いを秘めていたものをと、日々悲嘆に暮れています。

そして出稼ぎの都合とは言え早く帰つてやれば、文字が読めなくとも手紙の一通も出してやれば、こんな事にはならなかつたと、日夜自分を責める日々が続きました。

ある日思い余つた嘉右衛門は、濤響寺の第一八世国誉上人の許を訪ね、日々自

分を責める辛い思いを打ち明け、是非佛弟子として入信したいと願いました。

上人は佛に仕える入信の厳しさを説き、嘉右衛門に翻意を促しましたが、嘉右衛門の心の固さを知ると快く濤響寺に迎え入れ、毎日佛に仕える厳しい修行に明け暮れ、嘉右衛門はうら若くして世を去つた妻の冥福を祈る日々を送りましたが、それでも心の癒えることがありませんでした。

やがて嘉右衛門は笈をまとい、坂東三十三ヶ寺の巡礼の為に、家族や知人、國譽上人の見送りを受けながら旅立つて行きました。

坂東とは現在の関東地方の事で、相模の国〔神奈川県〕武藏の国（東京都、埼玉県）安房の国〔千葉県〕上野の国〔群馬県〕常陸の国〔茨城県〕下野の国〔栃木県〕の八ヶ国の総称で、今でもこの国々の札所を巡るのは大変なことですが、凡そ二百年も前の昔の旅の事ですし、總て徒步の巡礼は想像もつかない、不自由で辛いものだつたと思います。

こうして嘉右衛門は亡き妻の菩提を弔い、辛い巡礼の旅から帰りましたが、そのまま自家の「舎人」（とのり）の山へ小さな庵（いおり）を建て、念佛三昧の暮らしへ送つたと伝えています。

宮城県の塩釜市で、選舉管理委員会の事務局長をされ、郷土史家と知られる土

井憲司氏に、「文化の年代に仙台は人を受け入れられる、状況であつたのか」を問い合わせたところ、「其の頃の仙台の暮らしさ人を受け入れる余裕は無かつた」と返事がありました、また「どういう職業なのか、仙台と言う固有の場所を指しているが、それは東北の、仙台に近い所を指しているのでは」との事でした。それからこの庵は「とのりの庵屋」と、呼ばれるようになりましたが、それがこの庵屋の創始の由来とされて、今この「(とのりの庵屋)」の御本尊佛として祀られている千手観音菩薩は、かつて嘉右衛門が巡礼の折、笈で背負っていた仏像と言われています。

安政五年「西暦一八五八年」濤響寺の第一九世西譽上人のとき、島の石田五郎左衛門他の人たちが坂東札所の巡礼をした時、嘉右衛門の坂東札所巡礼の故事に因み、此処に坂東三ヶ寺の觀世音の名を刻んだ石碑を設け、巡礼の記念としてから、「庵屋の札所」と呼ばれるようになりました。

其の後嘉右衛門家では代々この庵を大切に守つて来ましたが、なにせ遠くもあり山畠の忙しい時や、漁業の忙しい時はついつい手が届かない事があるので、止む無く自家近くの七軒町の出先の「せんき」に、この庵と札所を移しました。其の時、札所の「坂東三ヶ所順礼場」と刻んだ、石碑を嘉右衛門家の婆さん

が頭に載せて、この山道を「せんき」まで運んだと言います。

其の後濤響寺の住職が「夢の中に嘉右衛門が現れて、どうしても元の場所へ帰りたいと言つていたので元の「とのり」へ移しては」と嘉右衛門家の家族に言わされたので、再び「とのり」へ庵と札所が移し替えられました。

其の時、「坂東三ヶ所順礼場」の石碑はどうしても重く、運べないので其の石碑は取り残されました。

昭和六〇年頃「せんき」の跡地を宅地化するため、この石碑を「とのり」迄運ぶ事になりましたが、何せ狭い山道ではあり、血氣盛んな若者八人でやつと運んだと言います。

其の昔、「とのり」から「せんき」まで、それも頭に載せて運んだと言う、嘉右衛門家のお年寄りは大変な力持ちだったのか、佛の力添えがあつたのだとも伝えてています。